ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報紙

Take free!

なび

3月号
vol. 085

特集：都市のインフラ

企業のミッション

特集：都市のインフラ

企業のミッション

住宅運動の現在進行形
ー台湾の住宅事情からー

（株）ナイス地域開発事業部長
竹中伸五氏に聞く

台湾は1985年から1990年にかけて急激な土地バブルを経験した。1坪7万台湾ドル（1台湾ドル＝3円）が5年後に28万台湾ドルとなった。持家施策を推進していた台湾では、賃貸住宅市場が未成熟なこともあり、低所得層や障がい者、高齢者などの社会的弱者への住宅供給や、都市部での不動産価格高騰が大きな問題となった。

このような背景が「無殻蝸牛運動（宿なし蝸牛運動）」を引き起こした。蝸牛はカタツムリであり、住まいを殻にたとえ、無殻蝸牛で台湾の住宅事情を端的に表現した。そして、1989年8月26日に4万人以上の市民が集まり、地価の最も高いエリアで野宿する集会が開かれた。

この運動に起源をもつ、3つのグループが現在も活動している。1つ目がサービス提供の事業体である「崔媽媽基金會（チェママ基金、略称：チェママ）」、2つ目が住宅運動を推進する「社會住宅推動聯盟（社会住宅推進連盟）」、3つ目が住宅問題やまちづくりのシンクタンクである「中華民國 專業者 都市改革組織（中華民国専門家都市改革組織、通称：OURs）」。これらの団体がそれぞれ役割を担い、台湾で「社会住宅」の実現を追求している。そんな台湾の住宅事情を前回に続き、竹中氏に聞いた。

セルフビルディング？個人任せ？

竹中：８月と11月の２回に分けて台湾に行きました。まちなみはセルフビルディングが盛んで魅力的でした。戸建はほとんどなく、中層か高層のアパートやマンションが多く、その壁にはベランダというか、後付けの格子があふれていました。特に１９６０年代から80年代にかけて、行政が建設し販売した住宅が集中する南機場（ナンジーチャン）というエリアでは、６階建ぐらいの中層住宅が建ち並び、路面は飲食店、共用階段には洗濯物、外壁一面に格子などと、雑多でアジアの下町感が漂っていました。

ただ、物件管理の視点からすると、維持管理が心配になりました。言い過ぎかもしれませんが、たとえば地震が起こった時などに大丈夫か？と。日本では分譲マンションであれば管理組合があり、賃貸住宅であればオーナーが物件の価値を維持するために、長期修繕やリフォームをしますが、建物全体として管理している感じがしませんでした。最近、外壁の格子設置に規制ができたとは聞きましたが、物件の安全性確保や管理が個人任せになっているようです。

佐々木：南機場というエリアの開発が60年代にスタートしたということは、千里ニュータウンとほぼ同じ。建物の老朽化だけでなく、高齢化問題などは検討されなかったのだろうか？

竹中：どこの国も同じかもしれませんが、建物の老朽化は住民の高齢化や、安価な家賃を余儀なくされる低所得層の集中があるようです。南機場では、里長（リーチャン）とよばれるまちの有力者が、コミュニティ施設づくりを呼びかけ、子どものための図書館や幼稚園、仕事づくりを目指した喫茶店やフリースペース、高齢者にはデイサービスや食事サービス等を提供していました。

佐々木：それは税金や制度で建てられた？

竹中：公費がどの程度入ったか、正確な情報は聞き漏らしていますが、建設費用の約１８００万円は地域住民や企業の出資をベースにしたと聞いています。また、食事サービスは通常１食２４０円のところを、子どもは無料、高齢者には60円で提供しているようで、地域のニーズに応えたサービスを提供していました。

佐々木：食事や居場所の提供は、どこでも共通の課題になっている。「楽塾」でも何度か韓国や台湾から視察を受け入れたことがある。住まいや仕事だけでなく、生きがいというか自らの拠り所を求めるニーズは高まっていると感じる。

南機場

大龍峒

若者の住まい

竹中：アジールコートで単身勤労者向け住宅を手掛けていることもあり、若年者向けの公営住宅が印象に残っています。２０１２年に建設された大龍峒（ターロントン）公営賃貸住宅ですが、低所得の世帯だけを対象としているのではなく、「持家取得の資金を入居中にためてもらう」というコンセプトで、20～40歳代で収入区分が50％以下であれば入居できる住宅です。

若者を意識しているのか、地上11階建の高層マンションで内装デザインはＩＫＥＡ、最新の太陽光発電設備やサニタリー製品も用意されていました。入居期間は５年間と限定されますが、家賃は市場の７割程度。当然人気も高く、倍率は３００倍だったそうです。

ただ、入居者に高いモラルを求めていました。物件管理を受託する民間企業は入居者のルール違反をチェックし、減点のポイントがたまると強制退去させる仕組みを導入していました。退去を前提にするのではなく、長く居住してもらうためにポイント制をナイスでも活用できないかと、いま考えているところです。

佐々木：南機場と大龍峒は、両極端。行政や制度はどちらかに振り切れて、「ええ湯加減」にはならない。大阪市では新婚世帯向け家賃補助制度があったけど、家賃補助みたいな仕組みはないのか？

竹中：台湾は持家が７割で、賃貸住宅仲介業もあまりないみたいです。南機場では壁や窓にオーナーの電話番号が貼ってあって、借りたい人は直接連絡するみたいです。賃貸住宅市場が整備されていないので、制度的に家賃補助をするのはなかなか難しそうです。

安康

社会運動が良いマーケットを創る

佐々木：竹中氏と同行した田岡君の印象は？

田岡：竹中さんと同行して一番印象に残ったのはチェママです。民間企業に先駆け、未成熟な賃貸住宅市場のなかで、学生や若者の賃貸住宅紹介を無料でおこなっていました。ただ、悪徳引越業者の被害にあうケースもあったので、安心・安全な引越をめざし、業者の登録とお客様評価制度を導入し、評価された業者がお客さんを獲得できる仕組みをつくっていました。業者からは紹介料として３％の手数料を受け取り、アンケートに答えたお客さんには５％の割引制度を導入し、好循環を生み出しています。いまでは台湾の引越マーケットの１割近くのシェアがあるそうです。

また、日本の引越サービスを学ぶ機会を設けたり、技術を競うオリンピックを開催したり、住まいの法律相談をしたり、良いサービスづくりにも一役買っていました。居住問題を問うてきた運動から生まれたチェママが、その間接的な分野でマーケットづくりをしていたことに驚きました。

南機場

あと、チェママとしっかり連携するＯＵＲｓのメンバーは若くて元気でした。社会運動から生まれたシンクタンクに20歳代の若者が住宅の専門家として、熱意をもって関わっていたのは新鮮でした。

竹中：確かにＯＵＲｓは元気だった。娘と同年代の若者が、大学と連携しながら、安康（アンカン）の公営住宅の建替を、住民参加型まちづくりとして牽引したり、公営住宅＝貧困層というスティグマにならないよう、いろんな所得層が同じ住宅に住めるソーシャルハウジングを提唱したり、賢くて、熱かった。

佐々木：米国のウォール街、日本の反原発、ウクライナ反政府デモなど国際的なうねりのなか、自分たちの住む住居環境の獲得をめざし、次代の息吹が台湾にも広がりつつあるんやね。

（記録：田岡　監修：佐々木）

［田岡秀朋］道路交通法がかわり、自転車は右側の路肩走行が禁止になりました。まだ取り締まりにはお目にかかっていませんが、みなさんご注意を。

［平川隆啓］田岡さんに続いて自転車のはなし。最近、鍵をかけずに30分後、見事になくなっていました。ということで、歩くことが多くなっています。みなさんご注意を。

大阪の南、西成とその周辺の味わい深いまちの魅力を掘り下げつつ、地図に重ねていく「サウスオブミナミ」。雑多なカルチャーの集積地サウスオブミナミの深層にちょっと触れながら地図を描いていきます。

サウスオブミナミ

vol.12

ナイスな住まい、ナイスな暮らし

4月からの1年間、いろんな西成をはじめ、そこに息づくローカルカルチャーを探して歩きまわりました。暮らしも、仕事も、遊びも、学びも、ぎゅっと凝縮した地域の一面に触れてきました。

1年のしめくくりは、そんな魅力的なサウスオブミナミ西成で取り組む（株）ナイスが発信する住まいと暮らしのエリアを取り上げてみました。

ブランコート

空き室あり☑
入居前リフォームの
キャンペーンも実施中！

若者向けの賃貸住宅。間取りもいくつかのパターンがあり、デザインを取り入れたこだわりの住まい。例えば、キッチンも対面や背面のものなど、暮らし方に合わせてバリエーションが用意されています。

文化温泉

大きなお風呂で大満足。井戸端ならぬ風呂端ばなしも弾みます。ピンクの煙突が目印です。

アイビスコート

高齢者も元気に住み続けられるような仕掛け（サービス）つきの賃貸住宅。1階にはおいしいうどん屋「一紀」もあり、お昼どきは地域の方々が集まり、にぎやかになります。

古着屋りぶら

子ども服からおしゃれな大人服もしっかり充実。掘り出し物もきっと見つかるリサイクルショップ。

ナイス薬局

健康を応援する薬局。いろいろ健康相談にのってくれる。あなたも身近なかかりつけ薬局を見つけてみては？

くらし食堂

しっかりとした味付け、こだわりの食材を、リーズナブルに。お昼も夜もおいしいお店。

ナイス

住まいの相談はこちらへ。ちょっとしたリフォームやインターネットのことなども承ります。

三星温泉

いろんなお湯と楽しみながら銭湯ライフ。地下には楽塾の拠点もあります。

アジールコート

西成暮らしをスタート。そんな西成で働いたり、住み始める単身用の賃貸住宅。一人暮らしにはゆったりの間取りに加え、バリアフリーであるところもポイント。

コミュニティハウス萩

暮らしを応援する支援つきの住宅として考えられた、コミュニティハウス萩。支援者とつながりながら、入居から日々の暮らしまで、サポートの輪をひろげていきます。

text・photo：Hirakawa Takaaki／illust：hidarimaki・chiyoko

リレーなびトーク No.12

「西成ではたらくママとパパたち：総集編」

ちょうど１年目のリレーなびトーク。これまでに12人の方々に出ていただきました。パパママトークから、地域でのいろんな取り組みまで、多彩に話を繰り広げてきました。今回は、そんな中から「ひとこと」をピックアップしながら振り返ります。

１年間続くのかと心配な中、まずは編集部の平川と田岡でスタートしたリレーなびトーク。「迷いながら歩くのも楽しいよなぁ」と、仕事やプライベートで歩いたことが、それぞれこのまちに関わるきっかけになっていることに気づきました。

そして、5月号。ナイスの田岡と保育園で働く西野さん。地域の子どもたちの遊びについて、話が繰り広げられました。西野さんも参加する子育てネットが取り組む子どもたちの居場所づくり。そのひとつ「あそパー」で大切にしている想いが「誰もが遊べる公園」でした。その想いは、西成を越えて、たとえば阿倍野で活動する「昭和のあそび広場」という取り組みともつながっています。

6月号でもあそパーが話題に。西野さんと子どもたちの居場所で働く植月さんの会話で、「たくさんのお母さんに知ってもらって、活動に広がりを持たせること」が大切だけど、難しい。そんな想いからできた保護者が中心に集まって活動する「ぴよちゃんネット」も徐々に活動を広げています。

7月号は、植月さんと雑貨店を営む菅さん。「みんな難しく考えすぎ」という言葉から、「みんなで助け合いながら、かたく考えずに、居場所も子どもも育てていければいいね！」と人が集まる場所もそこに集まる人も一緒に成長していく自然な流れの大切さを感じました。

8月号は、菅さんと近所でカフェを開く篠森さんで、子どもや親たちとのご縁について話が盛り上がりました。小さな場所から地域に目が向きはじめるときのワクワク感が、「ここで楽しいことが起こるのが好きなんよね」というやさしい言葉にあらわれていました。

9月号では、篠森さんと、さらにその近所のギャラリーの熊谷さん。「親子でいろんな作品を見てもらって、いつもと違う会話が弾む」という言葉通り、近所に雑貨屋、カフェ、ギャラリーなどいろんなお店があり、地域の人たちが行き交う場になっていました。アートや、ものづくり、気軽なおつきあいなどに触れることのできる場が、結ばれていくのを感じます。

10月号は、近所つながりから離れて、初対面の熊谷さんと、楽器店を経営する清家さんの新鮮な会話が繰り広げられました。それぞれの体験と子どもたちの周りの環境とを重ねながら、「子どもたちには自分のやりたいことを頑張ってもらいたい」と、成長を見守る親の姿が浮かんできました。

11月号は、またまた初対面の清家さんと小手川さん。小手川さんが働くアートNPOココルームの取り組み「釜ヶ崎芸術大学」について盛り上がりました。釜芸は自由に学べる場として地域に開校した大学。「隠れた才能が開花してます」という言葉からも、やりたいことや学びが集まる場ときっかけは、とても大切なのだと感じます。

12月号は、小手川さんと、ナイスでハウジングを担当する竹中さんで、空家などの地域のストックに目が向きました。高齢化は進み、一方で木造の密集市街地などの再生は進まない、そんなまちの課題。「もっと地域の若い人が入って、バランスをとって行けるような方向に」地域ストックを活用できればと、未来が語られました。

1月号では、ちょっと知っていたけど、ゆっくり話をする機会がなかった竹中さんと、子育て支援の現場で働く関口さん。「ほんのちょっとの地域の助け合いが、お互いいい関係で復活していくような」西成らしい流れを伸ばすことなど、地域力の話になりました。

2月号は、関口さんと、詩人の上田さん。地域の中でのいい距離感でつながることで、助けられることがたくさんあるという経験が語られました。「一つの大きなものより、いろいろたくさん“ある”って知っているだけで安心」できるというのも、そんな地域のいい距離感なのかもしれません。

親、子ども、仕事、地域など、いろんな接点からつながった12人。「西成ではたらくパパ・ママ」をテーマに西成の今や未来を垣間見る機会になりました。さて、このリレーなびトーク、4月からは隔月でテーマを変え、まだまだ続きます！

[飯田沙保里] ようやく日差しがぽいぽんと春めいてきました。三寒四温もあって体調崩さないように気をつけなくては…！

いい湯かげん

非貨幣税外収入で地域が動く

「社会福祉の基礎構造改革」が障害や貧困等「状態」への対処から、孤立・排除等「関係」の紡ぎ直し（予防）へと社会福祉の舵を切り替えたことと、ホームレス支援活動が、運動から事業へと脱皮し、刑余者支援にまで領域を拡大しことで、生活困窮者自立支援法を手繰り寄せた。ボクは、炭谷茂さん（元厚労省事務次官）と水田恵さん（NPOふるさとの会前代表理事）という二人の顔を思い浮かべながら、厚労省官僚も社会運動も、この分野で、十数年来の「自己革新」を実らせたと敬服している。

法や制度に完全なものはないが、この法にも二つのハードルがある。一つは、法の条文で、生活困窮者とは「経済的に困窮し、最低限度の生活を維持できなくなるおそれのある者」と限定してしまったことだ。けっきょく生活保護の水際作戦にすぎないのではとの危惧も当然だ。しかし、ふるさとの会が、地産地消型の「無認可」介護事業で、制度から捨てられた重介護の人さえ受け入れ、なおかつ、介護支援を200人の生活困窮者の就労にまでつなげてしまった（「生活支援労働」と定義されている）ように、対象者を広く、深くしていく実践は、法の先を走っている。各地にそんな実践が広がってきたのが心強い。

もう一つのハードルは、この法が「出口戦略」として、福祉と雇用の間に「中間的就労」というステージを設定し、社会福祉法人の「非課税分地域再投資」を充て込んでいるのだが、その意図がどれだけ共感を呼ぶかだ。中間的就労ってどこにある？インセンティブ（奨励策）なしに誰がやる？という疑問は多い。しかし、社会福祉法人の「非課税分」が地域に還流したら、ましてや福祉が地域密着型産業であることを考えるとその市場は小さくない。ボクが言い続けてきた、公共サービス等を総合評価入札で「新雇用産業」にするというのも、コストのかからない中間的就労になる。ふるさとの会の「生活支援労働（産業）」も生活保護を原資にしている。炭谷さんは、退任後の人生を「ソーシャル・ファーム」に費やしておられるが、中間的就労ではなく「第三の職場」と表現された。「非課税分地域再投資」や「総合評価入札」や「生活支援労働」や「ソーシャル・ファーム」は、いずれも自治体にとって税収とは別の「非貨幣税外収入」であり、国に天引きされない収入だ。そこに、橋下改革の「西成特区構想」のような行政改革が重なり合うと、画期的なコミュニティ経済が登場する。

ボクは橋下さんとこれで改革競争をやると言い続けてきた「社会運動（事業）の自己革新」の潜在力とはこういうことだ。その昔、部落解放運動では「女性が変わると部落が変わる」と言われてきた。社会運動が変われば、社会福祉法人が変われば、社協が変われば、生活困窮者自立支援法が輝く。一人一人に出番がありそうでわくわくする。

㈱ナイス代表取締役
冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[四井恵介] 今年は北国への出張が多くて１月以降、旭川、札幌、盛岡、仙台、そしてソウルと寒いところばかり。大阪が寒いのかどうかもよくわからなくなってきますが、ふと気がついたら春の兆しが・・・

西成活動記

第十二回「ひと花プロジェクト」

発見と表現の居場所

西成区は、一人暮らしの高齢者が多いと言われます。みんながそうと言うわけではありませんが、孤立という課題も突きつけられます。そこで、地域に居場所が点在していれば、そんな課題にも取り組めるのでは。そんなことではじまったのが、ひと花プロジェクト。

今回は、ひと花劇団を結成し、オリジナル劇「人生双六」に取り組みます。公演は、3月16日！

文・写真：平川隆啓

ピースのつぶやき

ピースの育ての母の赤井まゆみです。ピースがお喋りしたい事や思っている事を、これからもたくさん感じ取って、みなさんにお伝えしたいと思っています。

『私のメダルは、金・銀・銅？』
私のしっぽ、大きくて長く
ふさふさしている。
ねずみのしっぽ、細くて長く
すっきりしている。
豚のしっぽ、小さくて短く
くるくるしている。
お父さんのしっぽ、あれ？
見当たらない。
お母さんのしっぽ、あれ？
見当たらない。
お父さんの周りを
くるりと回って探してみた。
お母さんの周りを
くるりと回って探してみた。
見当たらないので、
何度も何度もくるりと回って
探してみた。
その瞬間、私のお目々は
くるくる回って、まるで
フィギュアスケート選手の
ようだった。
オリンピックなら
メダルとれたかもワンワン!!

赤井まゆみ

枝葉末節

二つの金閣寺 4

水上勉と三島由紀夫（最終編）

hidarimaki こと佐々木です。
私たち「楽塾」の、6回目の修了記念旅行が終わりました。
6度とも大雪を経験しています。
この旅が終わるともう春です。

三島由紀夫の『金閣寺』（3）

この小説の背景には、水上勉著の『金閣炎上』と同様、世間から追放された侮蔑、母親との葛藤、金閣寺老師への不信感を見ることができる。しかし、水上のそれとは別に、とくに敗戦のちの異文化による侵食、モラルを失った世間や小市民的通俗、とくに敗戦のちの占領軍の文化的侵食による醜悪さに一刀（ひとたち）与えることが、この小説の片鱗になっていることだ。そしてその一刀が金閣寺の消滅であり、そんな「目前に迫っている世界の変動、自分たちの秩序の目近（まじか）の崩壊をつゆほども予感して」いない小市民を嘲笑する。「金閣が焼けたら…、金閣が焼けたら、こいつらの世界は変貌し、生活の金科玉条はくつがえされ、列車時刻表は混乱し、こいつらの法律は無効になるだろう」と激しく逆襲する。そして、主人公の常なる孤独や、永遠に理解されることがないという諦念が、青年僧の存在理由でもあることがわかってくる。

三島由紀夫の『金閣寺』では、私たちの内面に伝統的に存在する美という価値――金閣寺への永遠の美は保証されていること、確信されていること――を、それらは浅はかな俗信であり幻想でしかないと警告し、青年僧自らの悪行を、社会的行為としてさらけ出し、かの青年僧の行為の正当化を訴えるのである。それは、水上が描く『金閣炎上』の、社会的に排除される青年僧が受ける悲劇に対する怒りや憤りとは異なる。三島は、歴史を越えて起立する金閣寺を前に生と死に直面する時、自らを全うしようとする美への殉死を訴えたのである。

終章では「生きようと私は思った」と書かれて終る。狂気を越えて、新しい美の獲得を担う美の礼拝者としての三島の矜持であった。

むせ返るような装飾をほどこす文体というか、作為的な修辞のなかで人間の生と死、精神と肉体の絡み合いを通し、主人公は際立った美に礼拝しひざまずき、金閣を永遠の金閣として独占していくのである。読み手に屈服を迫る恐ろしいほどの前衛性を感じた小説であった。

水上と三島の視座

最後に、水上勉と三島由紀夫の小説にあらわれる金閣寺への視座を考えてみたい。

水上の『金閣炎上』は、青年僧養賢が受けた社会的、環境的、身体性劣悪から来る劣等や怨念が反発や反抗を促したとする。社会の排外や不条理から遁走するために、金閣寺を放火し自殺を図るという動機から発した、いわば社会学説の骨組みをなしている。つまり、養賢という他者を社会生活者、らち外者として、青年僧への同情や共鳴を水上自身の経歴に重ねながら描く手法といえばいいだろうか。社会の路傍に捨てられた人たちの霊に、等しく生はあったというあかしを手向けた小説であったと考える。

三島の『金閣寺』は、社会の相変らずな無定形や無節操には背を向けながら、自らをマイノリティーの権化、美の礼拝者として描き、反社会的行為を続けることによって、精神や肉体の存在をあらわにし、それまで君臨していた金閣寺を放火するという究極の美を発見する。しかも美に殉ずるため、一度は死して金閣の絶対美を永久に残す決意をしながら、自身を美の巡礼者として再び甦らせ、生きることを決意させる。いわば金閣寺放火という社会的事件を換骨奪胎し、金閣寺を現人神として蘇生させ、青年僧に久遠の美という美酒を与えたのがこの小説の真髄であったのではないだろうか。しかもそのうえで、養賢は、美の巡礼者である三島の分身として描かれたのである。

「生きようと私は思った」と書いた三島だったが、一九七〇年、私たちに衝撃を与えて自害した。（了）

hidarimaki

思いたったら！
にしなりカレンダー

遊びも学びもみんなで楽しもう特集！

3月16日（日）

ひと花プロジェクト 2013 年度シンポジウム

2013 年 7 月からスタートした「ひと花プロジェクト」は、人生に花を咲かせようと、人々が集い、農作業や、表現活動などに取り組み、みんなが笑顔の花をさかせていく、そんな居場所づくりプロジェクトです。そこでの活動の様子や、他の地域のつながりづくりの事例などを学びあえるシンポジウムを開催します。

日時：3 月 16 日（日）10:00 - 16:40
場所：西成プラザ（太子 1-4-3 太子中央ビル 3F）
参加費：無料
主催：ひと花プロジェクト連合体
問合：ひと花センター
TEL：06-6649-7890
FAX：06-6649-7891
WEB：http://hitohanap.org/

3月29日（土）

「ちとり家」鉄道模型運転会

鉄道模型（N ゲージ）運転体験！1 回 5 分 100 円で楽しめます。鉄道グッズ販売もあり！鉄道コレクション・B トレイン・鉄道部品・鉄道写真・その他いろいろ。
運転抽選会では、ホーム停車両数に応じて賞品進呈。
車両お持ち込み大歓迎！

日時：3 月 29 日（土）11:00-15:00、17:00-20:00
場所：大衆食堂ちとり家（長橋 2-4-34）
入場：無料
問合：大衆食堂ちとり家
TEL：06-6562-1389
WEB：http://www1.ocn.ne.jp/~chitori/

3月16日（日）

市民交流センターにしなりフェスティバル

舞台発表あり、遊び体験あり、模擬店ありの、いろんな楽しみが集まる市民交流センターでのフェスティバルです。大人も子どもも一緒に地域のおまつりを楽しみませんか。

日時：3 月 16 日（日）10:00 - 15:30
場所：市民交流センターにしなり（長橋 2-5-33）
主催：大阪市立市民交流センターにしなり運営協働体
問合：市民交流センターにしなり
TEL：06-6561-0007
WEB：http://nishinari.org/

3月30日（日）

にしなり★プレーパークをつくろうプロジェクト

西成にプレーパークをつくろうと動き出したプロジェクト。今回は、「遊び講座」を開催し、みんなで「遊び場の環境」について考えます。

日時：3 月 30 日（日）13:00-16:30
場所：今宮ふれあい会館（天下茶屋北 2-8-11）
入場：無料
主催：にしなり★プレーパークをつくろうプロジェクト
問合：わが町にしなり子育てネット
TEL：06-6658-4528

あとがき

昨年４月の「なび」リミューアルから、早１年。大阪に生まれ育っていながら、あまり知らなかった西成のことを、たくさん知ることができました。

大衆演劇を鑑賞したり、地蔵盆でお地蔵さん巡ったり、アートプロジェクトに参加してみたり。この町がとても身近になりました。

４月、新年度がはじまります。花粉に負けず、新たな気持ちでがんばります！

（高橋）

なび2月号（vol.85）
発行日：2014年3月10日（創刊日：2007年1月1日）
発行：株式会社ナイス
発行人：代表取締役 冨田一幸
印刷：有限会社前山企広
住所：大阪市西成区長橋3-6-33　電話：06-6563-1156
E-mail：info@nice.ne.jp url：http://www.nice.ne.jp/

編集長：佐々木敏明
編集・表紙写真撮影：田岡秀朗、平川隆啓、四井恵介、飯田沙保里
イラスト：hidarimaki
デザイン：高橋静香

（表紙の写真は「リレーなびトーク」総集編です。）